

現代中国語における “ 見 ” の多義構造と統語的特徴

黄 利恵子

1. はじめに 中国語の「見る」の概観

人間の五感に関わる感覚を表す動詞には「見る 見える、聞く 聞こえる、かく 匂う・香る、味わう、ふれる」等がある。しかしこれらの語は、「味を見る」「春の足音が聞こえる」「彼は匂う(怪しいという意)」「自然を味わう」「やさしさに触れる」などの表現があるように、感覚表現には共感的あるいは非共感的メタファーが多々見られる。¹ さらにその中でも高次感覚である視覚を表す動詞「見る」は、感覚からメタファー的に或はメトニミー的に派生したさまざまな意味を有し、思考・判断、さらには行動等を含意する。² 又「見る」は、「観る」「看る」「診る」等の同音異漢字も多い。

この多義性は現代中国語にも共通して見られる。現代中国語において「見る」に関連する語彙はかなりの数に上り、“看、见、瞧、喽、瞅、视、观、目”などがそれである。その中で、“瞧”と“喽”は方言、“瞅”は俗語であり、“看”の有する意義範疇の一部を担っている。“视、观、目”は、現代中国語において、bound form の語であり、単独で一語として機能することはできない。この“视”がもつ意味は大きく分けて2つある。1つは“视觉力、视线という言葉に表れる、まさに視覚的对象認識という「見る」の基本義であり、いま1つは、“视察などの語に表れる、思考、判断、調査等の派生義である。

“看”が形態素となる単語には、“看守 护 看などがあり、それぞれ「調べる、見守る、判断する」などの意味を表している。日本語と同様に多義性を有しているが、その派生の方向に関しては差異が見られる。また“望、窥、盯、瞥、瞟”等、“看”の類義語は視覚的对象認識という“看”の基本義に極めて類似するが、その対象の捉え方は限定されている。“盯”はその動作が長時間で強い意図性があり、“瞥”は一瞬の動作、“瞟”は斜めから見

ることを表す。また遠方を見る意を有する“望”は、その空間的距離が時間的距離に転用され「希望する」という派生義を生じる。中を見る意味を表す“窺”は、内面を探るといふ派生義を生む。このように基本義の意義範疇が狭い分だけ多義性は低い。

2.“見”の意味

本稿は、上述した「見る」の意を表す現代中国語のいくつかの語彙の内、“見”の統語的特徴と多義構造の分析をその目的とする。“見”は“
、
、
”などの語を構成し、「会う、知識を得る、～される、当たる」などの多義性を有している。

現代中国語の常用表現として“
、見
”³ があるが、これは視覚的には見ているがきちんと見えていない、聞いていても聞こえていないという意味から、比喩的に「重視していない」等の意味で用いられる。³ ここでの“視”は主体的行為であるが、対象を認識しておらず、“見”は主体的行為であるかどうかは不明であるが、対象は認識されている。この“看”と“見”に見られる意図性と非意図性の対照的語彙とすることも類似する。しかし非意図的で対象認識を表すという意味は“見”の本質的意味ではなく、一側面に過ぎない。

池上(1993A)は、「初段階的感覚」は自動詞を用い受動的に表され、「認知」に近くなればなるほど主体的な性格を有するようになると述べている。⁴ しかし、例えば「見える」を例にとると、「何かが見えた」という「初段階的感覚」を表すと同時に、「彼は社長に見える」という能動的関わりを伴う高次認識も表している。日本語における感覚動詞には自他の対応が見られるが、中国語にはもともと2、3の動詞を除き自他の対応がないため、“
見
”⁴ のように、感覚動詞に“見”を後置することによって「初段階的感覚」を表すことができる。一般的に「初段階的感覚」は、感覚機能が感覚対象を捉えられる範囲内に存在すれば、思考や意図の介在無しに自ずと認識される。しかし厳密には、「初段階的感覚」においても、対象は取捨されており、主体の能動性を全く排除することはできない。

日本語の「見る」と中国語の“看”は、「感覚・知覚・認知」という視覚的对象認識、視覚に基づいた理解、判断、処置等の拡張された意味を有し、さらに視覚の関与しない理解・判断等も意味する。しかし“見”は、視覚的

対象認識の意味は稀薄で、対象から抽出された二次的意味の認識を意味すると考えられる。二次的意味とは、主体にとって何らかの意味を生じうる対象が備えている性質を指す。それゆえ、対象の視覚的映像は背景化され、対象から主体への二次的影響に焦点が移り、非視覚的、非動作的、非主体的、相互的という性質を持つ。たとえば「木を見て過去を思い出す」という場合、過去の経験から木の一要素である過去との関連性(二次的意味)が認識され、過去を思い起こさせる二次的影響を主体に与える。この時、視覚機能を働かせる主体的動作は強く意識されず、木の視覚的映像は背景化される。このように思考的関与の強い高次認識を伴う“看”に対して、情緒的感情的関与を有すると考えられる“见”の多義構造については次章で詳しく分析する。

また“见”には、以下の統語的特徴が見出されるが、これも上述の“见”の意味から導かれる。

過去の事象を表わすアスペクト辞“徧”との共起が多見される

動作の継続・状態・様態を表わすことはできない

(* + 着 zhe * + 完 * + 得 唸)

因果関係を表す複文の前件での生起が多見される

複文の前件と後件は心理的自然発生的誘因と結果である

人を対象とする場合、統語的には極めて自由である

主語の位置に無生物が生起する

特定の動詞を後置に前置され、抽象的被動を表す

感覚主体は一般に人を含む動物であるが、“见”には、主語の位置に無生物の置かれることがある。日本語においては「布が壁に触れている」のように、触覚を表す感覚動詞の主語の位置に無生物が置かれることがある。詩人や画家がしばしば「樹がわれわれを見つめ・・・」と捉えるように、Merleau-Ponty が述べる「物のうちにおける視覚作業の萌し」や「人間以前の眼差し」が存在し、⁵それが言語表現においても表われているのである。感覚する手と感覚される手があるように、パラドクスを有する身体は「感覚する物」「主観的客体」という二重性をもった存在であり、生物と無生物はそれほど厳格に分けられるものではない。人は、夢の中で記憶上の映像を見ることができる。又現代科学は、眼の見えない人が映像を見ることが可能にした。見るという行為には、眼に依存した視覚作業以外の意味が含まれている。本稿は“见”を通時的に分析するものではないが、“看”と異なり古

代漢語に語源を持ち、多様な意味の変遷を経て、現代中国語においても極めて抽象的な意味を有している“見”の多義を分析する。

3.“見”の多義構造の分析

3.1 存在に焦点のある視覚的对象認識

(1) 。(鉛筆が見当たらない。)

この表現における“ ”は今までは見えていたはずのモノが見えなくなったことを表す。つまり“了”の付加によって、いままで視界内にその存在を認識したモノが視界から外れたという意味が表されるが、“見”自体は対象の視界内存在の認識を意味している。

しかし、この形式は肯定に用いられることはない。「ある」を「見える」と言い替えると、一般にその焦点は「存在」から「視覚的对象認識」(能力・可能性等)に変化する。しかし、「鉛筆が見えない」は、視覚機能や認識可能の客観条件でなく「(存在し)なくなった」ことをも意味する。このように“ ”の形式で生起するのは、視覚という主体的関わりに焦点があるのではなく、対象の視界内存在に焦点があり、対象の存在を表すからである。

視覚については、(Lakoff)などによって存在を表す容器のイメージスキーマを用いて説明されてきた。視覚の容器 = 視界内の対象存在認識は“看见”、容器外の対象存在は“没看见”、容器内に存在した対象が容器から外れた場合に“不见了”と表わされる(3.10を参照)。しかし、以上の視覚の容器と対象の存在の関係では、感覚主体は背景化され、主体の視覚の関わりは表わされない。

3.2 出現に焦点のある視覚的对象認識

“見”は、対象が出現し視覚で認識できる状態にあることを表す。

(2) (病気が目に見えて良くなり出した。)

(3) (しかも木が見えると唯る全部に漆をかけた。)(四世)

(2)は良くなる状態、(3)は木という対象が視覚で認識できるという出現状態に焦点があり、認識できるという主体の能力や客観的条件に言及しているものではない。

3.3 経験に焦点のある視覚的对象認識

“見”はさらに対象が主体にとって非日常的なモノであり、対象認識に困難性が伴い、必然的に経験の有無に焦点があることを表す。

(4) 厘没需狛寄今。(私は海を見たことがない。)

(5) 厘_𠄎需需寄今。(私は海を見たい。)

対象は、「海」や「パンダ」、「殺人」、「多くの奇妙な事」、「こんなに古い型」などの非日常的なモノである。視覚的に対象を認識するという行為ではなく、それに基づいた経験に焦点があるため(4)(5)のような経験の有無や希望は表わせるが、次の(6)(7)のように動作の状態を表わす文は非文となる。

(6)*我効磨需寄今阻。(私は彼と一緒に海を見た。)

(7)*厘 𠄎着寄今。(私はずっと海を見ていた。)

また、「あなたのかばん」のような日常的对象は不自然となり、それが非日常的对象であるという前提の下でのみ成立する。

(8)*厘短需狛低議淫。(私はあなたのかばんを見たことがない。)

(9) 油傍他議皮淫頁匯為定念做議,但厘珊短需狛。(彼のかばんは100年前に作られたそうだけど、私はまだ見たことがない。)

“过”と共起(統語的特徴)

まず、以下の三グループの例文を比較してみる。

A「あなたが送ってくれた写真はもう見ました。」

(10) 慵 , 嗶儿 @ 。

(11)* 慵 , 嗶儿 @ 。

B「あなたが送ってくれた写真はもう見ました。」

(12) 慵 , 嗶儿 @ 。

(13)* 慵 , 嗶儿 @ 。

C「知らないでしょ!あなたの昔の写真見たことあるのよ。」

(14) 悴 ! 吧 你 虻 嗶

(15) 悴 ! 吧 𠄎 虻 嗶

AとBは、送られた写真を見るという動作がすでに完成したかどうかを述べる表現であり、Cは、本人が知らない小さいころの写真という、対象を認識することの困難性が提示されており、経験に焦点のある表現となる。つまりBの“过”は動作の完成を表し、Cの“过”は経験を表す。この時“看”

を用いた場合は、すべて成立するが、“見”は、経験の“过”とのみ共起可能である。

動作に焦点がない(統語的特徴)

“看”は“ 、看 着 ”⁷動作のAspectを表す表現や“看!”という命令文として成立するが、“見”はいずれも非文となる。さらに“看得 咯”“看 了”は成立するが、“*见得 咯”“*见 拙阻”は不成立となることから“見”が動作を意味するものではないことがわかる。このように“見”は、動作そのものよりも視覚的対象認識に基づいた経験を意味する。

3.4 視覚的対象認識に基づく、心理的影響を及ぼす誘因の認識

前節で見たとおり、“見”は経験の“过”と共起し、動作、行為、作用、変化の完成を表わす“了”とは共起しなかったが、因果関係を表わす複文の前節では成立する。これは原田(1997)の小説の分析とも一致する。⁶(統語的特徴)

- (16) 飢 杞 饑 候 糶 魁
岬 (餓 羸 この景色は鴻漸が故郷を離れる前は見慣れていたのに、今見ると心はきゅっと痛み目頭が熱く涙が流れる。)
- (17) 牝式純霽磨凜商戦議高疏,公椎匯專節陀孤阻,詰凜音般壅心,字一仇阜返祇。(律廓)(唐さんは彼の目の輝きを見て、涙が止まり、伏し目がちに再び彼を見て、ぎこちなく手を伸ばして言った。)
- (18) 析繁匯霽嗤繁仞浜徭失議三,音喇誼戾互阻匯泣匹咄,參宴奂互湖強議薦量。(膨弊)(老人は自分の話を熱心に聞く人がいるのを見て、感動を呼ぼうと自然と声が大きくなった。)

(16)の例では、“見”は主体の心が痛み涙が出るという自ずとこみ上げてくる感情の誘因となった視覚的対象認識を意味している。(17)でも、“見”は、目の輝きという抽象的対象を認識することで、涙が止まるという状況を引き起こしている。視覚的作用より、主体の心理作用が大きく関与していると考えられる。また、後半の“看”は視覚的対象認識を表す意識的動作であり、その動作の後に次の動作が時間的に連続して起こる状況と解釈できる。この“看”は後に続く動作の心理的誘引ではない。(18)の例も同様で、すべて視覚的映像は後退し、主体に心理的影響を及ぼし得る二次的要素、即ち人が自分の話を聞いているという意味が主体に認識されたという解釈が成り

立つ。

但し、因果関係の中でも心理的自然発生的誘因と結果の関係に限られる。

(統語的特徴)

(19)*需阻磨議概, 厘_𠄎磨匯協珊壓宸隅。(車を見たから、彼はきっとまだここにいると思う。)

(20) 需阻磨議概, 厘_𠄎𠄎阻。(彼の車を見て、車が欲しくなった。)

(21)* 𠄎壇, 𠄎_𠄎そのドアを見て修理を始めた。)

(22) 厘需阻壇, 𠄎怒阻。(そのドアを見て逃げ出した。)

(19)の例の前件は判断の根拠・理由であり、後件の状況を生み出す誘因ではないため非文となる。そして(20)においては、車を見たことが、買いたいという主体の感情を引き起こしている。車の存在を認識したのではなく、車を持つという主体にとって特に関わりのある抽出された意味が主体に認識されている。(21)(22)の文では、一見両者ともドアを見て連続して次の行動に移っているが、(22)は成立し(21)は非文である。(21)では、修理が必要と判断し、道具を準備するという、理性的な思考と行動を伴っている。それに対し(22)は、そのドアが持つ二次的意味 たとえばそのドアのある部屋に二度と会いたくない人がいる を認識し、瞬時にそこを離れようという意志が働いたのである。これは時間的な連続というより、前件が後件の行動を引き起こしたという解釈が妥当である。両者とも判断と行動が関与しているが、(22)における判断は、極めて主観的な経験と価値観に導かれたものであり、(21)の主体の経験に根ざさない理性的判断とは異なる。

以上からわかるように、“見”は、主体の経験に強く根ざした主体の感情・衝動・行動を引き起こす心理的誘因となる二次的要素を認識することを意味する。

3.5 理解に焦点のある人の視覚認識(相互的接触)(統語的特徴)

“見”が表わす人の認識は、社会的対人関係の上下とは関わらない。

(23) 惠将尖勤需厘、
。
。(社長が私に会いたいそうなので会いに行く。)

しかし、友達や同僚、家族という近い関係の日常的面会を表わす場合は不自然になり、(25)のように長い間会っていない等の条件を提示する必要が生じる。

影響を及ぼすものであった。“
”は、この誘因と影響という関係の類似性からメタファー的に視覚を持つ主体が関与しない誘因との接触を表す。一般に人間の身体は日々空気にさらされるが呼吸が苦しい等の影響発生によってのみ認識され、物理的接触は認識されない。これに類似する非固体 火、熱、風、光、寒さ、水等との接触を“
”は表す。固体との接触は視覚的、物理的で、対象の二次的抽象的意味との接触を表す“
”は不適切である。

また、この接触は状態変化、質的变化、身体的変化等の影響発生の意を包含する。

(30)
 (病人は風に当たるとすぐ熱を出す。)

(31)
 (熱に当たるとすぐ解ける。)

(32) 庵
 (この癩の薬は光に当ててはいけない。)

しかも(30)では主語の位置に人がくるが、感覚する主体ではなく、客観的存在としての人である。そのため、「風に当たって気持ち良くなった」等の、感情変化は表せず、身体的変化に限られる。また“
需欠、需邦”等の表現は慣用的で悪影響のみ表す。例えば“
需高”は悪影響しか表わさないが、“
需阻高、需剩光”等の表現では、好影響、悪影響の何れの表現も可能になる。

このように“
見”は、モノが、接触を認識しにくい非固体の対象と接触し、それが誘因となって影響を受けることを表す。この時、もはや人の感覚(視覚)機能は全く関与していない。

3.7 メトニミー的派生の1 対象の存在

“
見”は対象の存在を表す。主体が対象を認識するということは対象が存在するということであり、視覚的对象認識は存在の一要素である。この“
見”の意味は存在に焦点のある視覚的对象認識(3.1)からメトニミー的に派生している。

(33)
 (会社の組織図は次ページにある。)

上例において“
見”は存在場所を示し、それは視覚認識が可能である意味をも包含するが、この文自体には視覚も視覚主体も全く関与していない。

3.8 メトニミー的派生の2 対象の出現

“
見”は対象の出現を表す。対象の視覚的認識とは対象が存在し、かつ視覚と接触可能な状態で出現していることであり、視覚認識は出現の一要素で

ある。この“見”の意味は出現に焦点のある視覚認識(3.2)からメトニミー的に派生している。

(34) 躰躰 (仕事に初めて成果が出た。)

(35) 。(その薬を齧むと効果が現れる。)

上の例文において“見”はある状況・症状等が出現したことを意味している。例えば(34)では契約成立等の状況の出現であるが、視覚は関与していない。

3.9 メトニミー的派生の3 抽象的被動経験(統語的特徴)

“見”は抽象的被動を表す。(二次的要素を)見ることは、経験の一要素であり、かつプロトタイプとも言える。従ってこれは経験に焦点のある視覚的对象認識(3.3)からのメトニミーによる派生義である。この意味において視覚はほとんど関与していないが、実際には経験に焦点のある視覚的对象認識と連続的なものである。抽象的被動とは、たたかれる等の身体的、直接的被動ではなく、“ ”、“ ”、“ ”(笑われる、教えられる、愛される)等の抽象的間接的影響を受けることである。また“見”では対象から主体への二次的関わりに焦点があると2章で述べたが、たとえば、「笑われる」とは人が笑っている状況において、主体に対して笑っているという意味を認識し、経験することである。“看”では、主体は対象の外にあり、それを視覚的単方向的に認識するが、“見”では視覚は関与せず、主体も外部対象との相互作用の中に存在して状況を認識経験する。

3.10 補助動詞(語の場合)

メタファー的派生の2 対象の存在認識

“見”が補助動詞として後置される動詞は極めて少ない。感覚動詞では、視覚に関わる“看、瞧、瞅、睺、望”等と聴覚・嗅覚を表す動詞“听(聞く)、闻(匂う)”があるが、触覚・味覚を表す動詞“尝、摸、触、碰”等には“見”は後置されない。これは日本語において、触覚・味覚を表す感覚動詞に明確な自他の対応がないことと符合する。それは次の理由によると考えられる。視覚・聴覚・嗅覚においては、感覚主体と感覚対象の間に一定の距離が存在し、多くの対象が接触可能な状態にあるが、味覚・触覚では主体と対象は直接接触であり、対象認識には食べる等の能動性が必要となる。そ

のため逆に、存在の認識が焦点とはならない。感覚動詞に後置された“見”は、視覚の要素は消失し、感覚機能が達する範囲内の対象存在の認識を表す。これは存在に焦点のある視覚認識(3.1)のメタファーによる派生義である。たとえば“~~窠鳥~~の音が聞こえた)は、鳥の声の存在認識が表現され、主体的感覚の関与は背景化される。また“見は「初段階的感覚」から高次認識までを表すが、それ以外は高次認識を表すことはできない。

メトニミー的派生の4 経験

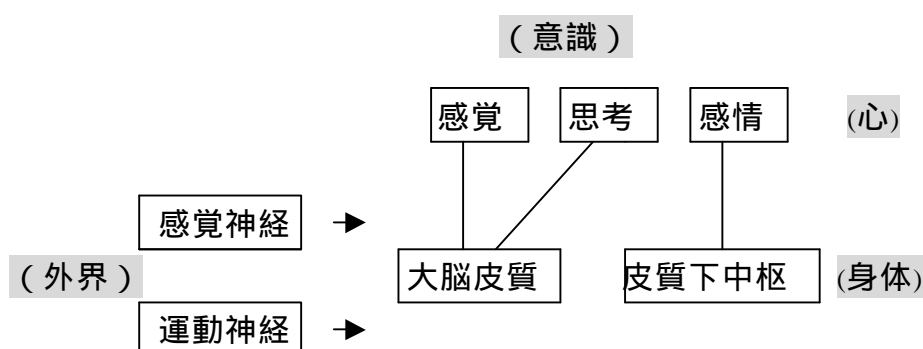
“見”は感覚動詞以外に“夢、碰、偶”に後置されて、経験を表す。これは視覚的認識に基づく経験(3.3)からのメトニミー的派生義である。“碰”は触覚動詞でもあるが、“見”と共に起す際は“偶”と同様の意味で、“~~見~~偶見”は共に、出くわすという偶然的経験を表す。人や抽象的事象を対象とし、物体は対象とならない。“見(夢見る)も視覚は関与せず、睡眠中に経験に基づいて蓄積された映像が主体との関連の中で意識化されることと、覚醒中に空想を描くことを意味する。つまり何れも非現実の世界を経験することである。これら基本動詞は、“見”が意味する経験の、方法や環境を表している。

4.まとめ “見”の多義分析

日本語・英語の場合、視覚は多義性、主観化(思考の関わりが増大)において、他感覚に対する優位性を持っている。⁷ “看”も同様であるが、“見”には異なる方向性への意味の拡張が見られた。本稿の分析により“見”の意味は以下のように分類される。(括弧内は典型的日本語の意味)

<u>二次的意味に</u> <u>焦点のある視覚認識</u>	<u>非視覚的派生義</u>
存在(見当たらない)	メトニミーの1 (～に記載) メタファーの2 (補助動詞)
出現(目に見える)	メトニミーの2 (表れる)
経験(見たことがある)	メトニミーの3 (～される) メトニミーの4 (補助動詞)
誘因(～と出会い・・・)	メタファーの1 (～に当たる)
人の理解(～と会う)	

湯浅 (1996) は、外界 (対象)・身体・意識の関係を図式化して示している。この図で、“看”は運動神経と思考に焦点があり、“見”は感覚神経の二次的要素と感情に焦点が有る。“一 情(一目ぼれ)にこの意味がよく表れている。以上の分析から、“見”の中心的意味は次のように定義することができる。⁸ 対象から抽出された二次的意味の認識。視覚的要素は稀薄で、視覚的映像は背景化する。思考的(“看”)ではなく、感情的である。主体的単方向的関わり(“看”)ではなく、相互的双方向的である。



このように現代中国語においては、視覚に関して二つの語彙により意味の役割分担がなされているということが出来る。

本稿では紙幅の関係で“只见”、“见到”、“见着”、“见上”の分析はできなかった。“见”の通時的考察とともに他稿に譲る。

注

- 1 洪玉芳 (1999) 参照。
- 2 田中聡子 (1996) は「みる」の多義構造として、視覚+認知を基本義に、基本義+理解判断、基本義+理解判断+処置、他の知覚+理解判断+処理、視覚を含まない経験と理解判断を設定している。
- 3 『礼記・大学』“心不在、視而不見、聴而不聞、食而不知其味”。
- 4 Lakoff (1987) 池上訳 (1993A) 745 頁の訳者解説において、外国語を聞く場合を例に、「感覚」は連続した音が聞こえる段階、「知覚」はまとまりを聞き分けられる段階、「認知」は意味を読み取れる段階としている。
- 5 Merleau-Ponty (1964) 滝浦他訳 (1966) 266 頁・359 頁参照。
- 6 原田 (1997) 参照。
- 7 山梨 (2000) は、感覚モダリティと思考・判断への拡張を、視覚>聴覚>嗅覚>(? 味覚)>(? 触覚) の順としている。

8 池上 (1993B) は、すべてに共通する意味の「基本的意味」或は「中心的意味」は、概念内容を稀薄にするとして否定し、多義性の構造を、任意の 2 つの意味単位の恣意的な関連性に還元する。

用例出典

台葉：析普 (1993) <台葉^フ徨> 析普式傍畠鹿 及膨壤 海臭獺篡竈井芙
 律廓： (冊69) 律廓 愀 樵
 四世： 舍(1999) 四世同堂 裱 霽嫔
 なお、出典を明記していない用例は作例である。

引用文献 (引用順)

- 洪玉芳 (1999) 「感覚語の比喩的な意味による感覚転移の問題」『中国語学』246
 日本中国語学会 31-39 頁
- 田中聡子 (1996) 「動詞「見る」の多義構造」『言語研究』第 110 号 日本言語
 学会 120-142 頁
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993A) 『認知意味論』紀伊国屋書店
 (原著 George Lakoff (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What
 Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press)
- 滝浦静雄・木田元訳 (1966) 『眼と精神』みすず書房
 (原著 Merleau-Ponty (1964) *L'Oeil et l'esprit*. Gallimard)
- 原田寿美子 (1997) 「小説内にみられる“見”“看见”“只见”等の用法について」
 『中国語学』247 日本中国語学会 124-131 頁
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版
- 湯浅泰雄 (1996) 『身体論 東洋的心身論と現代』講談社
- 池上嘉彦 (1993B) 『意味論』大修館書店